

黄金の郷

こしえるびと

つむぐストーリー vol.112

高い志のもと、日々“キラリ”と光る活動をしている人たちがいる。“黄金の郷”いわて平泉を支える、魅力溢れる“こしえるびと”のメッセージをシリーズで紹介していく。



PROFILE

鈴木 寿弥さん (35)

Kazuya Suzuki

一関市山目町

1988年一関市中里生まれ。水沢農業高校、県立農業短期大学校で農業を学び、卒業後20歳で就農。水稲24.5%。両親、子2人の5人暮らし。

力を付け規模拡大を図る

一関市山目町

鈴木 寿弥さん

就農するのは当然のこと

まだ冷たい風が吹く遊水地に、トラクターのエンジン音が春の到来を告げる。暖かい日差しを浴びながら、鈴木寿弥さんはトラクターを巧みに操る。

代々の水稲農家に生まれ、幼い頃から両親の働く姿を見てきた寿弥さん。中学生の頃には家の農業を継ぐことを自然に決めていた。その当時、一関遊水地の基盤整備事業が始まり、まだ何の知識もなかった中学生にも、将来的に規模拡大や効率化が進んで農業がしやすくなるのが理解できた。農業高校を卒業後、県立農業短期大学校に進み、農業に関する知識や農業経営に必要な免許・資格を取得。卒業後は迷わず就農した。

地域の人たちに見守られて

20歳で就農した寿弥さんは、父の俊夫さんに教わりながら仕事をする日々が続いた。仕事をしていると、地域の人々が「今日も頑張っているな」と声を掛けてくれた。以来、今に至るまでずっと見守ってくれていると感じている。

4年前に経営者となった寿弥さんは、「長年農業をしてきた人の“目”はずごい」と俊夫さんの知識や判断力に敬意を抱き、「能力を付けるため、父にはまだ元気で現役でいてもらいたい」と俊夫さんの経験を頼りにしている。経営を引き継いだ時、水稲苗の育苗枚数を見直した。10ア当たりの苗枚数を減らし、育苗ハウスの規模を変えずに2回転することで販売する苗の枚数を増やした。また、無人ヘリコプター

で農薬散布の請負事業も行っなど、仕事の幅を広げている。

仲間と地域の農地を守る

「今の倍の経営規模を目指したい」と寿弥さんは話す。収量と食味の安定を図るために堆肥の投入を欠かさず、基本をしっかりとこなすことに向き合う。地域の将来を考え、農業を守るためには「50〜70鈴経営でできる力を付けていくことが必要」と分析する。「自分の力でできることを増やすことが、これからの農業には必要になってくる」と寿弥さん。今年にはレベラーを導入し、圃場の均衡に挑戦する予定。遊水地という特殊な地域で規模拡大を図りながら農業を続けるために、寿弥さんは歩み続ける。